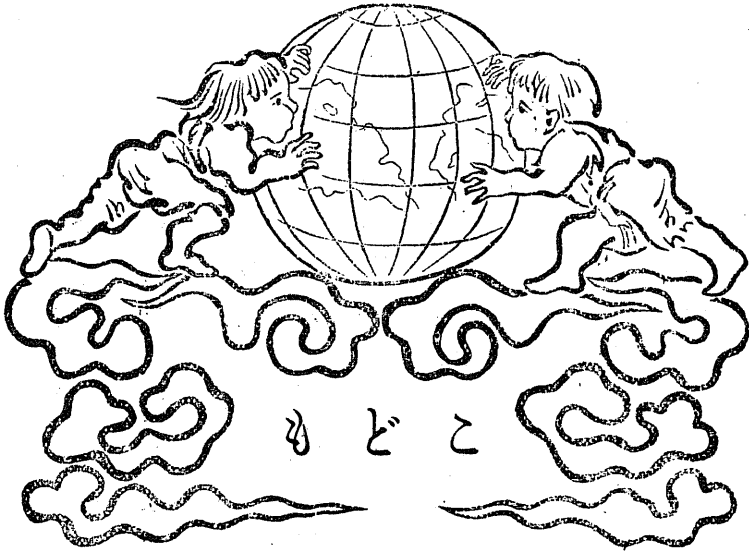


も どり と 人 婦

號 八 第 卷 貳 第



黒作と狼

やまとの翁

黒作わ 永年田舎の百姓に  
 飼われた忠義な犬でありま  
 したが、だんく年をとる  
 につれて、齒もぬけてしま  
 い、力もなくなり、はやく  
 走ることにも出来なくなつて  
 もーとても、もとの様に役  
 にたゝなくなりましたから  
 家の主人が、ある日お女房

さんに申しますにわ、

『黒作も　もーあの様に年を取って、役に立たないから　明日わ思い切って　打ち殺してしまをーじやないか』

けどもお女房さんわ、さすがに可愛相だと思ひまして、

『夫でもあなた、あんなに永い間、忠義をしたんですもの、もー役に立たないからって、殺して仕舞うのわ、可愛相ですわ、

私しや　彼が病氣で死ぬまで食べさせてやりたいと思ひます』

すると主人わ、

『オや、お前何をゆーの、黒作わもー齒が一本もないのだよ、盗賊だつて彼を怖がりわしないよ、永年忠義をしたに違わないけども、其代り毎日食べさせてやつたじやないか。』

憐あはれな黒くろ作さくわ 先まき程せきから門かど口ぐちの日ひ當あたりのよよい所ところで心こころもちよく  
 仰あや向むけに寝ねて四し足そくを伸のばして休やすんで居ゐたのですが、不は圖ち主しゆ人じん夫か婦よ  
 の話はなしを殘のこらず聞きいたもんですから、さー明あ日すになると 自じ分ぶんの  
 生い命ちがなくなるとゆーので、心しん配ぱいでくくたまらなくなりました。  
 所ところがこの黒くろ作さくに一ひとり人りの友とも達だちがあります。それわ森もりの中なかに住すん  
 だる狼おおかみなのです。黒くろ作さくわ 一ひとり人りで考かんえてもくく助たすかるよい工く夫ふ  
 がでないもんですから、其その晚ばんになって、そっと狼おおかみの所ところえ行いって  
 明あ日す殺ころされるのだとゆー 悲かなしい話はなしをして どーか助たすかる智慧ちゑ  
 があるまいかと 相き談だんをしました。しますと狼おおかみわ  
 『あるもとくくお父とうつあん 大だい丈じやう夫ふ金かねの脇わき差さ！ 私わがが付ついて居ゐ  
 ますよ。其その工く夫ふとゆーのわ こーです。明あ日すの朝あさ お前まへさんの

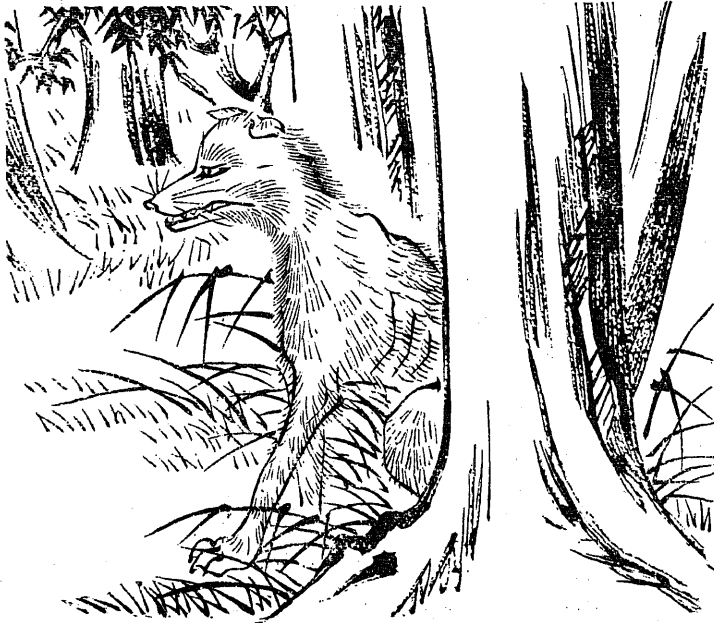
御主人が　れ女房さんと　屹度畑え行くに違ない

『黒行くに違ない』

狼『すると　家には誰も居ない  
から　あの赤ん坊も連れて行く』

『ウン連れてゆく』

狼『それから　畑で二人が仕事  
する間　赤ん坊は木の蔭え寝  
かして置いて、そらお父つあ  
ん、お前さんを番人に付けて  
置きましょー。』



『黒フン附けて置く、夫から…』

『狼』そこで、そこえ私が森の

中から そーっと出て行って

其赤ん坊を盗んで駆け出す』

しますと 黒作わ眞黒くな

って 怒り出した。

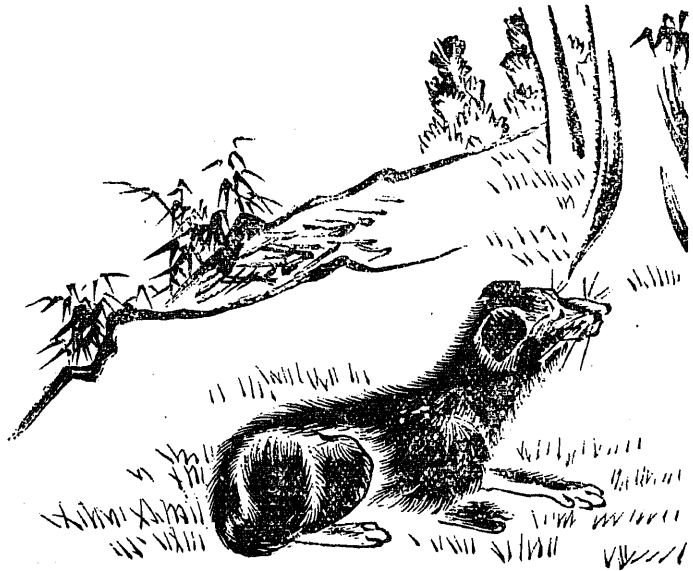
『黒』そりや承知しないよ、主人

の赤ん坊を盗むなんか、出来

るなら盗んで見よ すぐお前

の生命を貰うから』今にも飛

ひかゝり相に身構しますから



狼わ狼狼てゝ飛びのきながら

『あゝ、まったく、お父っあん、眞實に盗むんじやーない、それが計略なんですよ、よくきーてくれなきやー』

黒『フーン 計略なのか それなら早くそーいえばよいに、夫か  
ら』

『私しが赤ん坊を盗むでしよー、そこでお前さんが夫を見附けて 一生懸命に私しを追っかける、私わ逃げる、とーく道へ赤ん坊を捨てる、お前さん夫を取り返して主人の所え持つて行くすると主人わお前さんの手柄に免じて、殺す所の騒じやない、今迄よりも余計に可愛がってくれる、どーです、甘い工夫でしよー』

黒『作わ一寸首を傾けて、考えて見て』

「黒いー工夫だが、なんだか主人を欺す様に當るなー」  
 狼「欺すったって、夫で悪い事をするんじゃないし、お前さんの生  
 命を助ける爲め丈けだから、いーじゃないか」  
 そこで黒作も、なる程と感心をして とーくやっつて見る事  
 にしました。

さて翌日になって狼が赤ん坊を嚙えて驅けて行くのを見た時  
 に 主人夫婦は吃驚仰天しましたが、黒作が一生懸命に追っか  
 けてすぐ取り返して来たもんですから 夫から主人わ大變に黒  
 作を大事にして、柔かい肉だの お魚の身などを料理して食べ  
 させるやら、寢所の藁を新らしいのと取り代えるやら、夫わく  
 今迄と打って變つて、大事に養いました。

或晩のこと、久し振りで、狼が黒作の所へお見舞いに來てこの具合のよいのを見て、まづお目出たいといって お祝をしまし

て、  
 『時に、黒作お父っあん、其代り私がお前さんの御主人の所から 羊を一匹取って行こーと思ーが、お前さん 此間のお禮に目をつぶって 見ぬ振をして居て下さいな』

『そりや、不可ないよ、主人が折角私を信用して大事に養って呉れてるのだもの、そんなことが出来るものか』

けれども 狼わ黒作がじよーだんにいったんだと思つたもんですから、夜になつて そーつと牧場へ行つて羊を盗みに行きました。すると黒作わ すぐ大きな聲で吠え出しましたから、



番人が太い棒を持って出て来ていきなり狼をなぐりつけました。狼が吃驚敗亡、跛ひきながら『黒作お父、あんな覺えて居らっしゃい。今に敵を取るから』と叫びながら逃げて行きました。

さて翌日になると、狼の處から野猪が使に参りまして、黒作に出で来る様にとの事です。所が黒作の味方とゆーのは、一匹の猫より外にない、夫も一本の足を怪我して、三本足なのです。仕方がないから、黒作は三本足の猫と二人で行きます。可愛相に猫が足が痛いから、尾を高くピンと上にもち上げてピヨイピヨイと三本足で飛んで行きます。森の中に行つて見ますと、狼と野猪とわもー其場所に行つてちゃんと待つて居ま

す。けれども二人が遠方から黒作と猫とが遣つてくるのを見た時に、非常に吃驚しました。とゆゝのわ、猫の尾が眞直に立つてゐるのが、ちよゝど直前に長い劔を捧げて来る様に見えるし、三本足でピヨ―イ、ピヨ―イと跳ぶのが何でも自分等に抛げ附ける爲に、大きな石塊を幾つも拾つて居る様に見えたのです。そこでこの二人わ急に怖くなって、野猪わそこいらの藁の中に身体を埋めて仕舞う、狼わ木の上に昇つて仕舞いました。そこで黒作と猫と來て見ますと、この有様で誰も居ないので、から、不思議に思つて眺めて居ます。しますと、野猪わ、身体がみんな隠し切れなくて、耳丈けが出て、ピンくと動いて居ました。猫わ夫を見付けて、これは鼠だなど思つたもんですか

ち不意に其耳へ食い附きました。野猪は堪らないでキヤーン  
 と鳴いて飛び出して『木の上に悪者が居るのだよ』といーな  
 がら逃げて仕舞いました。二人が木の上を見ると、狼先生木  
 の枝につかまって居ましたが、大變に自分の弱かったことを耻  
 かしがって犬の前に下りて来て謝ってとーくもとの通り仲  
 直りをしましたとさ。めでたしく

